

研究テーマの見つけ方 -あなたは何に「心」が動くか-

「研究テーマが浮かんでできません。どうしたらよいですか？」

卒業論文のために研究し始めた学生からしばしば聞かれる、そして対応の仕方について個人的には非常に考えさせられる質問です。「それならば、研究しなければよい」と答えたいところではあります。しかし学生は、卒業するために研究をして卒業論文を執筆しなければなりません。自分で取り組みたいテーマがなければ、自分自身で積極的に調べることもなく、研究テーマを設定することができないというのは、当然のことのようにも思います。

研究をする理由は人によってさまざまです。「この現象を理解したい」「あの問題を解決したい」「面白い研究がしてみたい」「研究成果を残さなければ悪い評価がつけられてしまう」「指導教員（上司）に怒られたくない」……。特定の現象を理解することや、特定の問題を解決することなど、自分なりの特定の関心をもち研究したいと思っている人は、研究テーマを比較的設定しやすいように思います（実際にはいろいろと難しい側面はあるのですが）。その一方で、研究することを第一義に考えている人で自分の関心が不明確である人は、必然的に研究テーマを設定することは難しいでしょう。中でも、「研究したい」「研究しなければ」という気持ちが強い人ほど、その気持ちが空回りしてしまい、研究テーマの設定が余計に難しいと感じられるかもしれません。

しかし、研究をしたい気持ちを持っている人には、ぜひとも研究テーマを設定することで研究の第一歩を踏み出してほしいと思っています。研究推進委員会では、若手会員の研究者としての成長を支援する企画をここ2年さまざまな形で行ってきました。そうした企画の中で、若手研究者の方々から「研究を始めたい」「研究テーマをより面白くしたい」などの声をいただくことがあり、研究することへの興味を抱いてくれている方が少しずつ増えていると感じています。こうした気持ちは大切にしたいですし、実際に研究が遂行されて研究知見が増えれば、本学会にとっても大きな財産となります。研究推進委員会としてはこうした方々をぜひとも応援できればと思っています。

それでは、どうしたらよいかということですが、自分の関心が不明確ならば、その関心を明確にすること、これが当然のことながら研究テーマ設定の第1の

鍵となるでしょう。冒頭の質問をする学生のように、テーマが浮かんでくることを待っているだけでは、いつまでたってもテーマが「降りてくる」ことはありません。また、自分の関心を明確にしないまま興味があるからと特定のテーマに飛びつくと、後々そのテーマへの関心が薄れてしまった時には、研究意欲も失われてしまいます。

そこで、関心を明確にするためには、あえて思考を拡散させることが重要だと考えています。たとえば私が学生指導を行う際には、日常生活の中で不思議に思うこと、興味があることをノートに最低10個は書いてきてもらいます。その際、家庭・学校・友人関係・地域社会・日本社会などできる限り異なる場面を想定してもらいます。それらを改めて全体的に眺めてみると、個々に関心の偏りがあることに気づき、自分の関心の所在がどのあたりにあるか、わかることが少なくありません。また、不思議に思うこと、興味があることを直接的にあげられない学生には、納得いかないことを、時には怒りが湧くことにまで拡げて考えてきてもらうこともあります。この方法であげられる内容は、その個人が解決をのぞむことですが、大抵その個人にとどまらず多くの人にとっても解決がのぞまれることでもあります。とくに、本学会に所属されている会員のみなさまは、キャリアに関する何かしらに関心を持たれているかと思います。キャリアに関するテーマは、社会的な問題とも直結しており、納得いかないことを研究テーマとすることは、研究を行う上で重要な「社会的意義」を確立することにもつながります。

「研究では、『憤り』が力になる。」ある研究者が話してくださった忘れられない一言です。不快な感情を抑制することをよしとする教育が行われがちな日本ですが、そうした自分自身の不快な感情にまで真剣に思考をめぐらせてみる、こうした思考の拡散が、自分自身が心から取り組みたいと思う研究テーマに巡り合わせてくれるはずです。

(駿河台大学 杉本英晴)